



妻、貸し出します

妻のご主人様と
危険な好奇心





「あははは」

パラエティ番組の笑い声と共にみゆきが愉快そうに笑った。育代の腕の中では眠りに落ちる寸前のみさが乳首を吸った姿勢のまま固まっております、時々思い出したように音を立てて母乳を吸っている。ありふれているが幸せな一家団欒だんらんの光景だ。



「みゆき、お風呂入りなさい」
「は〜い」

番組の終了を合図にみゆきが風呂へと立つ。

一度自分の部屋へ行って着替えを持ってきたみゆきが風呂場のドアを締めた所で僕はみさとに乳をやる育代をまじまじと見つめた。

約一年前。

夫婦ふたりきりで温泉旅行に行った際、育代は三人の男と関係を持った。と言ってもそれは僕が

育代と男たちがセックスするように計らった結果なので浮気とは言い難い。

当時の僕は妻が自分以外の男に犯される姿を見たくて悶々としていたのを鮮明に覚えている。

だから育代に無理矢理酒を飲ませて男たちに育代を抱くようけしかけた。育代は悪くない。

悪いのは僕だ。

だが――




あの男たちの誰かの子供であるみさとを見るたびに腹の底が疼くのだ。
育代を滅茶苦茶にしてしまいたくなる。
愛しているがゆえに。



「後ろからするよ。お尻出して」
「もうちょっとで眠りそうだから……」
「みゆきに見つかっちゃうかももしれないし……」
「静かにやれば良いじゃないか」
「……はい」





今でもあの時の光景を夢に見る。
温泉で出会ったばかりで見も知らぬ行きずりの男に抱かれる
妻の姿は官能的で衝撃的だった。

育代が妊娠させられた事にも後悔はない。

しかし僕は卑怯にも育代に謝罪することはおろか、
育代の記憶があやふやなのを良い事に

さも妻の不貞を咎めるような態度を取ってしまったている。

過程をうやむやにして育代にとって

後ろ暗い事実だけを突き付けて言う事を聞かせていた。

今だって本当はみさとの前やみゆきに気付かれるような場所で

性行為をしたくないと思っっているはずだ。

だが僕の妻でありながら僕以外の子を産んだ育代は命令には逆らえない。

性欲を奮起させる趣向も押さえて、
遠慮なく要望を通すことが出来る現状を手放したくなかった。
旅行に行く前のセックスレスには戻りたくない。







広げた膣口に龟头を差し込むと
すぐに愛液で濡れ始めた。
ゆっくり膣の奥までペニスを挿入する。

「ん……」

陰茎の根本まで膣の中に侵入を果たすと
育代は微かに可愛らしい吐息を漏らした。
二人目を出産しても
妻の具合は衰えることなく
素晴らしい刺激を与えてくれる。



ほめ

ほめ

ズプ

ズプ

肉付きの良い大きなお尻と
温かい膣の感触を味わいながら
ゆっくり動く。
膣口に龟头が5回も往復する頃には
膣内はすっかり濡れている。
粘度の高い愛液がペニスに絡み付き、
弾力ある膣肉が精液を搾り取ろうと
ペニスを包み込む。
何度セックスしても飽きない感触だ。



みゆきや現在同居している母にセックスを見られないよう聞き耳を立てているのだろう。育代は身動きせずジッとみさとに乳を吸われ、僕に犯されていた。滑りも良くなってきた所だし、少し育代を困らせてやろうと腰の振りを強める。



はっ…

はっ…

「だめ、博司さん……！
みゆきに見られちゃう……！」
「大丈夫だよ。出たらすぐに分かるさ。
それにこの方が早く終わるだろ？」
「は、はい……」



んっ……

んっ……!

母の方はドアに付けてある鈴の音で
部屋の出入りが分かるし問題ない。
皆が寝静まった頃にすれば
落ち着いてセックスを楽しめるが
育代の嫌がる状況で
抱くことに意義があった。
僕の言いなりになっている
妻の姿が嬉しかった。



はっ……

はっ……

はっ……

「はっ、はっ、はっ……!」

育代は奥を突かれるたびに

微かに息を漏らす。

思い切り声を上げさせてやろうかとも

思ったがこれ以上音を立てれば

みゆきに気付かれかねない。

流石じじくに自粛した。

それに本番はこれからだ。

僕とのセックスは前菜に過ぎない。

今夜のことを思うと

射精寸前のペニスペニスがより一層硬くなった。

「中に出すよ……!」



「んっ、ん……!!」

下腹部を育代の尻にピッタリ合せて
膣の奥深くで射精した。
ピュルピュルと膣内で陰茎が脈打つ。



はぁ...

はぁ...

育代の膣口から僕の精液がトロリと零れた。
特製ソースを掛けて
育代というメインディッシュが完成した。

みゆきとみさとが寝た後、
みさとを母に預けて僕と育代はバーへ向かった。
出掛ける前にみさとは粉ミルクを十分飲んだから
朝まで起きないだろう。
夜泣きが少なく、よく飲んでよく眠る良い子だ。

「いらっしゃいませ。ハッピーさん」

ハッピーというのは僕たち夫婦の仮名だ。
プライバシーを守るために、
このハブニングバーでは全員仮名を使っている。




「さあ、脱ぎなさい」

「はぐ……」


いつものように指示をされると育代はためらいがちに
裸身を包むコートに手を掛けた。






育代の姿を見て
色めきたった男たちが近付いてきた。
コートの下で露わになっていく白い肌、
母乳で張っている大きな乳房、
くびれたお腹や肉付きの良い太もも、
そして僕の所有物の証である
膣から溢れる精液を男たちが
食い入るように凝視する。

なまめ
艶めかしい育代の肢体しんたいが舐め回されるように
注目を浴びていた。
この野獣のような男たちに
僕の命令ひとつで育代は
翻ひるがえられるのだと思うと下腹部が熱くなった。



「お願いします！ ハッピーさん！」
「お願いします！」
男たちが口々に育代を抱きたいと僕に迫る。
育代にセックスを拒む権利はなく、
主導権は僕が握っていることを
彼らは理解しているのだ。

最初は他の男に抱かれる事に
抵抗していた育代だったが
みさとの名前を口にするだけで従順になった。
最早育代は僕の性奴隷だ。



「まあまあ、まずは一杯やってから」
僕はマスターにマティーニを注文して
辺りを見回した。

ハプニングバーはキャバクラなどと違って
客同士で性交渉を行う場所である。
育代ほどの美人は中々いないので
いつもなら男の大多数が育代に群がるのに
今日は全体の半分にも満たない。



「今日はハッピーさん並の
大物が来ているんですよ」

僕の思考を読んだのかマスターは
そう言うとはベッドの方へ視線を送った。





なるほど、ベッドのひとつは入れ食い状態になっている。
育代に勝るとも劣らない美人が
自ら腰を振って男たちの欲望を全身に受け止めていた。



「あの人…… 黄瀬さんじゃない？」

育代が僕にそっと耳打ちする。

黄瀬さんというのはみゆきの友達の母親である。


確かに言われてみれば見覚えがある気はするが

記憶の中の黄瀬さんとベッドで男たちを食っている美女が

同一人物とは思えなかった。

何と言うか、表情に華がある。

美しいが淫らに咲く妖しい華だ。



気持ち良さそうに、
そして嬉しそうに男たちと体を重ねる淫靡いんぴな姿は
思わず目を見張ってしまう。
セックスに消極的な育代にはない魅力がある。

「確か黄瀬さんって未亡人じゃなかったっけ」
「そうよ。ひとりでこんな所へ来てるのかしら……」
夫のいないシングルマザーが
性のはけ口としてここを利用しているのだろうか。
いや、そんな事は今はどうだって良い。
プライベートを詮索するのは野暮だし、
それよりも黄瀬さんと育代が競い合ったら
どちらに軍配が上がるのかが気になった。

ちゅぽ
ちゅぽ

パイ
パイ

ヌ
ヌ
ヌ

「反対側のベッドで抱かれてきなさい。
どっちが男を虜にするか勝負だ」
「勝負だなんて…… でも…… はい。
あなたがそう言うなら……」

コートとブーツを店員に預けると
育代は言われた通り、
黄瀬さんとは反対の位置にあるベッドへ向かった。





「あー！ 良いね！ ハッピーちゃんのマンコ最高だよ！
経産婦とは思えねえ！」



男のペニスが膣に挿入されると育代は小さくあえいだ。
セックスしたまま目の前に出されたペニスを遠慮深く口に含む。
一年前は夢にまで見た光景だったが
今では僕の命令ひとつで育代は他の男に抱かれるのだ。
先程射精したにも関わらず、妻の痴態に僕のペニスは硬くなっていた。

「はあはあ、ハッピーちゃんのおっぱい……」




男のひとりが育代の乳房に食い付く。
赤ん坊のための母乳をむさ苦しい中年男性が必死に吸う姿は滑稽だった。
育代はどう思っているのだろうか。
苦悶の表情を浮かべて男たちの攻めに耐えている。

妻の犯される姿を見て興奮するものの、
同じ行為を繰り返せば感動も薄れていくものだ。
他の男に妻を抱かせる価値があるくらい興奮はしている。
しかし何か物足りない。





黄瀬さんらしき女性は腰を突かれるたびに歓喜の声を振わせ、美味しそうにペニスを舐めている。楽しそうにセックスする様は見ているだけでも情欲をそそった。



ふたりの女を見比べてみて1年前を思い出した。
あの時は育代が酩酊して前後不覚に陥っていたから
僕以外の男に対してもセックスを喜ぶ表情を見せてくれた。
今の育代にもっと喜ぶようにと言ってもあれが限界らしい。

ではまた酒を飲ませれば良いのか？
当時は貞淑な妻が他の男に抱かれるはずがないと半ば無理矢理酔わせた。
しかし酔って意識が混濁している状態で
セックスさせるのは趣に欠けるというものだ。
折角、僕の命令通りに他の男に抱かれるようになったのだから
育代の意思を保ったままセックスを楽しませてやりたい。
それが僕を一番興奮させるのだと確信していた。

不意にカウンターの端に座っている中年男性から話掛けられた。

「ハッピーさん、で宜しかったでしょうか。中々良い女性ですね」

「ありがとうございます」

「素材は最高級品だ。調教すればもっと良くなるでしょう」

「ははは、調教ですか。一応あれでも教え込んだつもりですけどね」

「そうですね」

失礼ですがあれではタッチワイフと大差ないかと思えます」

男の物言いにカチンときた。

育代を奪い合う競争に参加できない中年の僻みだと判断して顔を背ける。こういう手合いは無視するのに限る。

セックスを終えた黄瀬さんらしい女性が僕の方へ近づいてきた。全身に浴びている精液の量がまぐわった男の数を雄弁に物語っている。育代と圧倒的な差をつけられたのは明白だ。



「あの……黄瀬さんですよ？」

周囲に聞こえないよう小声で声を掛けるが女性は僕の横を素通りした。聞こえなかったのかと振り返ると女性は先程の中年の隣へ腰掛けた。

「話してさあ」

中年の言葉を聞いて女性は閉じていた柔らかくそうな唇を開いた。



「ごめんなさい。ご主人様の許可がないと勝手にお話し出来ないの」

「ご主人様……？」

「はい。この方は私のご主人様なんです」

育代を呼んで並んで座る。
黄瀬さんらしい女性はやはり黄瀬さんだった。
彼らのここでの仮名はピースというらしい。



性的な事に結びつかない育代と育代のママ友である黄瀬さんが
全裸なのでいまいち現実感が湧かない。
ツンと張った乳首に目を向けられないようにするのは注意が必要だった。

「ご主人様は元々会社の上司だったんですけれど
一度関係を持ってから少しずつ調教されて……
今では私、ご主人様の奴隷なんです」

「にこやかに言う台詞ではない。
困惑した表情で育代が問う。」



「ええっと…… やよいちゃんは？」

「もちろん知らないわよ。」

「ご主人様は公私をキツチリ分けてくださるから会社じゃ普通に接するし、家に来るなんて事もないわ。ご主人様はちゃんと私たちの都合を考えてくださるから会うのは休みの日か、やよいが寝てからだしね」



「そう…… 普通にお付き合いしてるって事なの？」

「うーん。普通とはちよっと違うかな。ご主人様と奴隷の関係」

さっきから抱いている疑問を挟んだ。



「奴隷だから……」

あんなにのびのびと楽しそうに、

ピースさん以外の男とセックス出来るんですか？」

「ご主人様が命令すれば他の男とセックスするし、

ご主人様が喜ぶようにセックスしているだけですよ」

黄瀬さんの言葉に感銘を受けた。
育代は僕の命令には従うが、
僕がどうすれば喜ぶかなんて考えてはくれないのだ。
夫と妻、主人と奴隷という関係の違いだろうか。



「千春も最初はセックスを楽しむのは悪いことだと勘違いしておりました。
ハッピーさんの奥さんもそうではありませんか？」

「それは……」

夫以外の男性とだなんて、やっぱり悪いことじゃありませんか？」

「いえ、一般的な倫理観は関係ないのです。
大事なのは貴女とご主人との関係なのです。」

「ご主人が貴女に何を望んでいるか分かりますか？」

「私は…… その…… 以前浮気をした事があるので、その罰なのかと……」
「違います。」

「ご主人は貴女が犯される姿を実に嬉しそうに見ておりました。
ご主人も貴女がセックスを楽しむようになったら良いと思っっているはずですよ」



「ハッキリ言い切る男の言葉は爽快だった。
ズバリと心中を射ている。
育代が僕の顔を不安気に見てくるので首を縦に振る。」

「楽しむようにとは何度も言っているんですが言っても聞かないもので……」
「だって…… そんなの無理ですよ」



そう、僕では無理なのだ。
だがこの男なら僕の望みを叶えてくれるかもしれない。
男たちに犯されている黄瀬さんの妖艶な顔が脳裏に浮かんだ。
育代のことをダッチワイフと言われたのも頷ける。

「……貴方をお願いすれば妻も黄瀬さんのようになれるんでしょうか？」
「私が見た所問題ありません。」
「調教すれば奥さんも千春のようになれるでしょう」



馬鹿な事だとは分かっているが胸が躍るような興奮を抑えきれなかった。
逡巡した後、意を決して申し出た。

「それでは…… 僕の妻を調教してくれませんか」
「えっ！ あなた……？」
「良いんですか？ 一時的とは言え奥さんを私の奴隷にするという事ですよ」
「はい」



「あなた…… いくら何でもそれは……！」
「僕の言う事が聞けないのか」
「それは…… でも……」
「大丈夫。君を愛している気持ちは変わらないよ。
習い事をするとも思えば良い」
「……」

「ふふふ。いいでしょう。」

ただし、奥さんの調教を終えた後に私からもひとつ、頼み事をさせて頂きますよ」

「頼み事とはどんな？」

「今はまだ言えません。」

「ひよつとしたら頼まないかもしれませんが約束して頂けますか？」



「……僕に出来る範囲であれば」

「それで結構です。では早速明日から始めましょう。」

調教中は奥さんを他の男に触らせる事はおろか

貴方も奥さんに触れるのは禁止させて頂きますよ」

「ふっ……妻はもう貴方の奴隷ですからね。分かりました」



こうして僕の妻は、この男の奴隷となった。

翌日。


普段と変わらない生活を過ごしていた僕たちだったが、
いよいよ約束の時間が近付いてきた。

奴隷になったと言っても不定期的に夜のわずかな時間を
あの男と共に過ごすだけらしい。

それで調教が出来るのかは疑問だが

妻を奴隷として他の男に貸し出すだけでも十分興奮させてくれる。

黄瀬さんの知り合いだから見知らぬ男よりも信用出来るのが安心させた。



「そろそろ時間じゃないか」
「博司さん…… 本当に？」
「ああ…… たっぷり可愛がってもらっておいで」
「……」



育代が近寄ってキスしてこようとしたので手を突き出し拒否した。

「今の育代はピースさんの奴隷だからね……」

「調教が終わったらたくさんしよう」

「……はい」

布団に入って目を瞑って興奮が覚めず、
とてもじゃないが眠れそうにはなかった。

今頃僕の妻はピースさんが

指定したラブホテルの中でセックスしているのだ。

妻が調教される姿を見たいと気持ち^は逸るが

調教の邪魔になるそうなので見学は却下された。

今はひたすら我慢である。

調教中は育代とセックス出来ない代わりに

黄瀬さんを貸してくれると言っていた。

女性の貸し借りなんてどうかと思うが、

恋人のような関係の彼らよりも

夫婦である僕らの方が道義から外れている。

部外者である僕が一番倫理観に問題があると思うと

何だかおかしくて笑いが込み上げてきた。

黄瀬さんは魅力的な女性だ。

だが、だからと言って肉体関係を持つのは抵抗があった。

僕はあくまで妻を愛しているから

他の男とセックスする姿が見たいのであり、

より妻のセックスを楽しむために調教を依頼したのだ。

他の女性を抱いても良いと言われてもピンとこない。

育代があつた男に犯されている姿を想像すると

陰茎はガチガチに硬くなって射精してしまいたくなる。

オナニーをしようかどうか迷うが

育代が帰ってくるまで我慢しておきたい。

落ち着こうとしても頭の中は

育代が犯される姿ばかり目に浮かんで悶々^{もんとん}と苦しい時間を過ごした。

わずかにだがカチャリと玄関が開く音を聞いた。

育代が帰ってきたのだ。

あの男に調教された妻が。

僕は跳ね起きるとリビングへ急いで向かった。

「おかえり！」
僕の姿を見ると育代はビクッと身を反らした。
驚かせてしまったらしい。

「……ただいま」
少し疲労の色が見える育代だったが傷付けられている様子はない。



「どんな事をされた？」
「ええと…… ご主人様が博司さんについて……」

ご主人様……
育代の口からあの男をご主人様と呼ぶのに感動していると
育代は鞆から一枚のDVDを取り出した。
白地のDVDラベルには黒のマジックで「二日目」とだけ記載されている。



「……今日の内容を撮ってあるってこと？」

「はい……」

「一緒に観よう」

「今から？ ……わかりました」

胸を躍らせて自室へ向かう。
育代はいつもよりも距離を取って僕の後に付いて来た。




動画は育代が部屋に入ってくる所から始まった。

「お待たせしました…… ピースさん、でよろしかったですか？」
「私の事はご主人様と呼びなさい」
「……はい。ご主人様」
「よろしい。さ、まずは服を脱ぎなさい」
「……はい」







あの男と育代が全裸でベッドに横になる。
今まで何度も僕以外の男に抱かせてきたが、
僕のいない所で育代が男に裸を晒すのは初めてだ。
僕の目が届かない場所で妻の肌が触られるのを見て
早くも興奮が最高潮に達する。



「君の夫が私に君を預けた理由は覚えてるかい？」

「黄瀬さんみたいな女性になるためです……」

「そうだ。どうすれば千春みたいになれると思う？」

「……わかりません」

「気持ち良くなればいい。簡単な事だよ。」

「私の手の感触を感じたら声を上げなさい。気持ち良さそうにね」

「……はい」



「はあっ…… はあんっ……」

「もっと力を抜いて、自然に。体が感じる快感をそのまま声に出せば良い」

「はあ…… はい…… ああ……っ」

「そうだ。他の事は何も考えずに、ね」

「はあ…… 考えないようにと言っても…… やっぱり…… はあ……」

「夫や子供の事、それに倫理的に間違っていると考えてしまうかな？」

「はい…… そうです…… んん……っ」



「それはとても大事なことだ。ただそれには普通の人々が普通に生活するために必要なだけだ。君の夫は違うよね？」

「はあ、はあ…… はい…… 夫は私を夫以外の男性に…… はあ…… 抱かせようと思います……」

「そうだね。君の夫はおかしくて、君が正しいんだ。セックスは何が正しいかなんてないんだ」



「あっ…… はあ、はあ……」
「大事なのは相手が何を求めている、
自分がどこまで相手に合わせる事が出来るかだよ」
「はあ、はあ…… はい……」
「君はどこまで夫の言うことを聞ける？」
「博司さんが…… はあ…… したいことは全部…… あっ……」



「あっ、あっ……！」

「良い子だ。私は君の夫に君を任された。

それがどういいう事分かるかな？」

「あっ……！ こ、こ主人様の…… 言う通りに、します……！」

あめ！

あめ！

ヌキキ

「そうだ。私という時は私のことだけを考えなさい。
それを君の夫は望んでいるし、君のためでもある」

「はあ、はあ！ はい……！ ご主人様……！ あっ！」

「舌を出して」ちん

「はあ、はあ……！ はい」

ヌ
チヤ
チヤ
チヤ

はあ…

はあ…






「んっ」

「しっかり覚えておくんだよ。私が君の飼い主だ」

「は、はい…… ご主人様…… ご主人様……！」

「そうだ。私のことだけを考えて、私が何を望むか考えなさい」

「はい……！」



画面にはしばらく男の舌を食るように吸う育代の姿が映し出されていた。唇と唇を重ね合い、口の端が開くと育代の嬌声きょうせいがこぼれた。ハプニングバーではほとんど呻き声のような声しか上げなかった育代が艶やかなあえぎ声を上げるのを見て、僕はペニスを硬くしながら拳をギュッと強く握りしめた。



「あつ……！ ゴ、ゴムは……？」
「必要ない。私がする事は全て受け入れなさい。
身も心も全て私に委ねるんだ」
「はい…… ご主人様……」

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ」

コンドームを付けていない剥き出しのペニスが
育代の膣に少しずつ収まって行く。

育代が僕以外の男と生でセックスするのは一年ぶりだ。

妊娠の危険が伴うセックスだと言うのに

甲高い嬌声を上げて男のペニスを受け入れる育代の姿は

この上なく情欲を掻き立てられた。

隣で身を強張らせている育代を押し倒してセックスしたい衝動に駆られる。

ゴ、ゴ、ゴ

ゴ、ゴ、ゴ

あつ

あつ

「良い子だ。ちゃんと声を出してるね」
「はい…………… あっ、あっ……………」
「君が感じている事を言ってるらん」

ズル
ズル

「はい…………… ご主人様のアソコが……………」
「あっ！ 私のアソコには、入っています……………」
「私のおチンポの感触は？ おマンコはどう感じている？」
「ご主人様のおチンポ…………… おっきくって……………」
「はあ！ お、おマンコ…………… き、気持ち良いです！」
「感じているのはそれだけかな？」
「知り合ったばかりの男性なのに……………」
「私のご主人様だと思おう…………… はあ、はあ！
き、気持ち良く、なってしまう……………」

はあ
はあ

「それで良い。 育代は優等生だな」

「あつ！ はあ……！」

「ありがとうございます……！」

「これから君のおマンコは私だけに使うんだ。」

「何故だか分かるね？」

「私はご主人様の…… 奴隷だからです……！」

はあ……

あぁ！

「そうだ。」

「君の夫にもセックスはおろか体に触られるのも許してはいけないよ」

「はあ、はあ……！ はい……！」

「私の事だけを考えなさい。 私が何を望むのか考えなさい」

「はい……！ 教えてください……！」

「ご主人様の言う通りにします……！」

「ふふふ。」

今日は私と君の関係をしっかりと覚えるだけで良い。
私をご主人様で、育代は私の奴隷だ」

「はい、ご主人様……！」
私は貴方の奴隷です……！」

ズッ
ズッ

あッ

かん

「私のする事は全て受け入れなさい」

「はい……！！ ご主人様のする事は嫌がりません……！！」

「身も心も全て私に委ねなさい」

「はい……！！ 全てご主人様の思いのままに……！！」

「そうだ。育代は私の所有物になったんだ」

「はい……！！ 私はご主人様の物です……！！」

「ふふふ」
男は満足そうに微笑むと
育代の体にのしかかった。







はあ……♡

はあ〜……♡

「あつ、あつ！ 出てる！ ご主人様の精子が…… 私の中に……！」

「私のザーメンの感触もすっかりおマンコに覚えさせなさい」

「はい……！ 私のおマンコがご主人様の精子で……」


「ザーメンで溢れています……！」

「嬉しいだろう？」

「はい……！ 嬉しいです……！」


育代は男を愛おしそうに抱き締めた。





開かれた育代の股から男の精液が流れて落ちていく。
僕は茫然と動画から目を離せずにいた。

僕の妻はあの男に中出しされたのだ。
調教を終えた後に
彼が僕に依頼する内容に検討が付いた。
育代を妊娠させて
自分の子を産めと言うのだろう。
調教期間中は夫である僕とも
セックスさせないというのに合点がいく。



怒りと不安、そして喜びと期待が胸を押し潰す。
喉がカラカラになっていた。

「ご主人様、それは？」

育代の声でハッとなる。

一瞬、隣にいる育代が声を出したのかと驚いた。

「陰毛を剃る」
「はい」

画面の中の育代は
男の台詞に何の疑問も抱かない様子で
シェービングクリームを
股間に塗られていた。





男は手際よく育代の陰毛を剃り落としていく。

「怖いかね」

「いいえ、怖くありません。

ご主人様がする事ですすから

失敗しても平気です」

「ふふ。良い子だ。

では何故こんな事をするのか

分かるかい？」

「陰毛がない方がご主人様の好みだから、

でしょうか？」

「私は陰毛の有無に興味はないよ。

性病予防というのもあるが

一番の理由は所有物の証かな」

「ご主人様の所有物の証……」


「そうだ。

私と会わない日も私の事を考えるように」

「はい、ご主人様」


陰毛を削ぎ落され、
すっかり男の奴隷と化した僕の妻が笑った所で動画は終わった。



A red-haired woman with a small ponytail, wearing a pink, vertically striped, long-sleeved, form-fitting dress, stands in a library. She has her hands clasped in front of her. The background features bookshelves filled with books and a desk with a television and a window with blinds.


あの男の奴隷は今、ここにいる。
気が付いたら育代のスカートに手を伸ばしていた。

「駄目！ 博司さん触らないで！」
「ちょ、ちよっと見るだけだよ……！」 剃られた所……！」
「駄目です！ 今あなたに触られたら……！」

A red-haired woman with a small ponytail stands in a library. She is wearing a long-sleeved, form-fitting pink dress with vertical stripes. Her hands are clasped in front of her. The background features tall bookshelves filled with books and a desk with a computer monitor and keyboard.

出掛ける前は僕にキスをしようとしていた癖に、
男と会った途端態度を豹変させた妻にカッとなった。
抵抗する妻の体を無我夢中で押さえ付け、スカートをめくり上げる。





スカートの下に隠れていたのは
下着ではなかった。
革で出来た奇妙なデザインの
下着のような物を育代は履いていた。

「これは……？」
「やめて、博司さん！ 離して！」

貞操帯という物だろうか。
脱がせようとしてもピクともしない。
ズラそうとしても無駄だった。
あの男に刺られた陰部を確認したかったが
ついには叶わなかった。



育代は声を殺して泣いていた。

「ご、ごめん……」

どうしても見たくて……」

「酷いです……」

私は博司さんのために必死に

あの人の奴隷になろうとしてるのに……」


「ごめん……」

「離してー!」

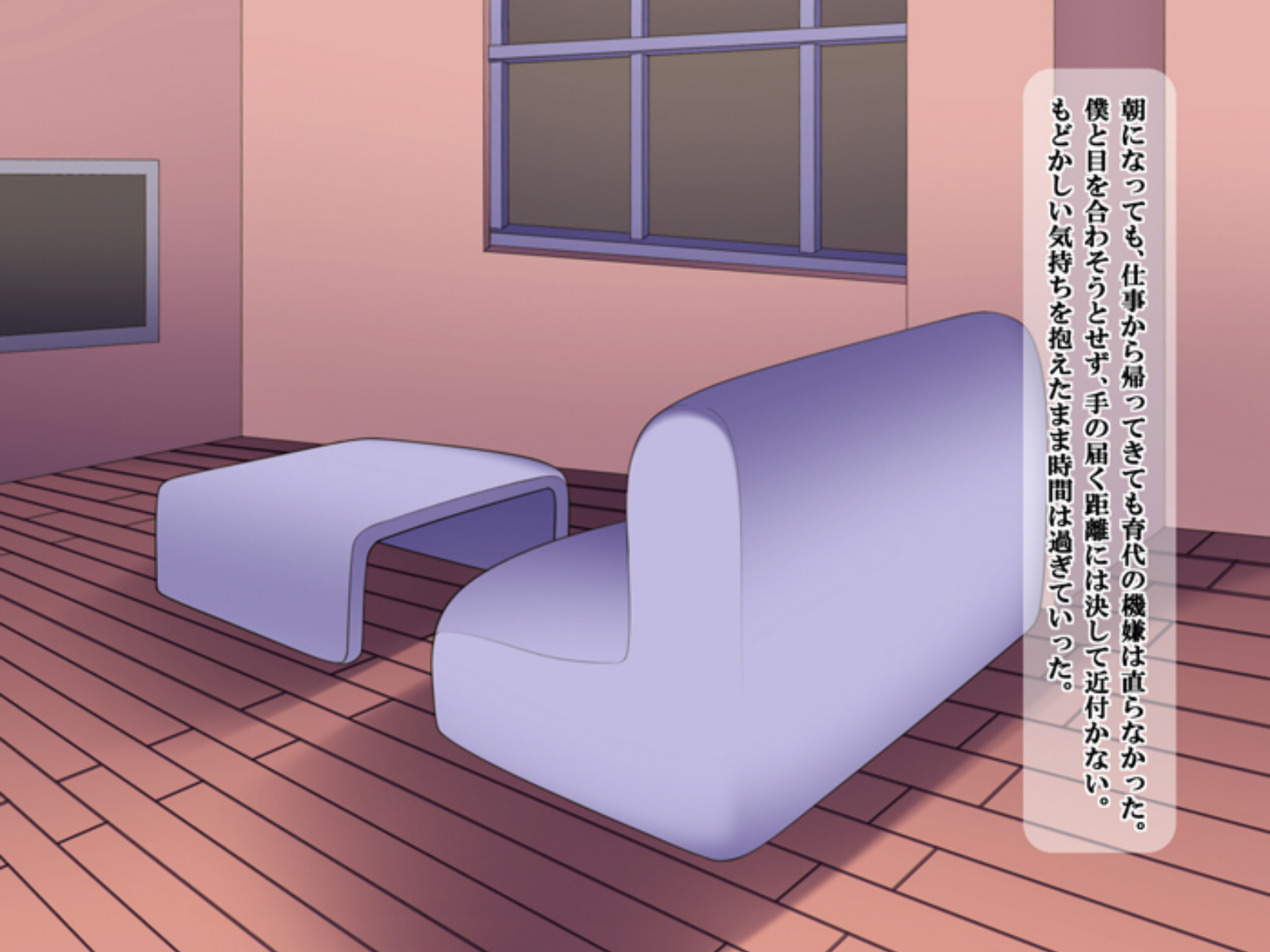
「もう寝ます……」
「あ、ああ…… お休み」

育代はみさとと母がいるであろう居間へ向かった。
普段なら僕も一緒に寝るのだが
育代に合わせる顔がないのでこのまま自室で寝ることにする。





動画の内容、そして貞操帯を付けた妻の姿を思い出して
オナニーをすると大量の精液が出た。

A minimalist room with a wooden floor, a window, and a chair. The room is rendered in a soft, muted color palette. A window with a grid pattern is visible in the upper right. A simple, modern chair with a curved back and a matching ottoman is positioned in the center. The floor is made of dark wood planks. The walls are a light, warm tone. A small framed picture hangs on the wall to the left.

朝になっても、仕事から帰ってきてても育代の機嫌は直らなかつた。
僕と目を合わそうとせず、手の届く距離には決して近付かない。
もどかしい気持ちを抱えたまま時間は過ぎていった。

「……行ってきます」
「あ、ああ……… 行ってらっしゃい………」

育代がご主人様の元へ向かう。
結局まともに謝る事が出来なかった。



育代の僕に対する態度は

あの男の言い付けを守っているだけではないと思う。

やはり僕が無理矢理育代のスカート覗いたのが原因だろう。

今の育代は僕の妻ではない。

あの男の奴隷なんだ。

僕のためにあの男の奴隷になるというのは相当な覚悟が必要だ。

僕の我がままに努力している育代の覚悟を

僕の我がままに踏みにじったのだ。

触れてはいけないと言われていたのにあの男の言葉を軽んじていた。

その男に育代を任せているというのに。

最低だ。

思えば1年前のあの目から育代の弱味を握ったつもりで増長していた。

育代に対して我がままを通すのが当たり前になっていた。

どこから謝れば良い？

1年前に育代が妊娠させられたのだから原因は僕にある。

育代も薄々は勘付いていると思うが

とてもじゃないが全てを告白するなんて出来ない。

とりあえず昨日の事を謝ろう。

そしてこれから育代に対して気遣うようにしなければ。

僕の協力もあって育代の努力が実るのだから。

自責の念に悩み、調教される妻の妄想に耽り、今日もまた眠れずにいた。

わずかにカチャリと玄関が開く音を聞いて布団から飛び起きた。

「おかえり！」
「ただいま」

てっきりまた目も合わせてくれないのかと思いきや、
育代は普通に目を見て返事をしてくれた。



「昨日はごめんね。僕が浅はかだったよ。
僕も出来るだけ協力するから……」
「ううん、いいの。そう言ってくれてありがとう」

ニッコリと微笑む妻を見て安堵した。
安心すると性欲がムクムク起き出してくるのが分かった。



「今日もDVDあるの？」

「うん…… はい、これ」

「それじゃ、一緒に見ようか」

「ごめんなさい、昨日もあまり寝てないから眠いの。」

「博司さんも早く寝たら？」

「……いや、僕は見るけど」

「そう。お休みなさい」

「……」

協力すると言った手前、お前も付き合えとは無理強い出来ない。いつもなら脊代が僕の誘いを断ることはしないのだが、そんなに疲れているのだろうか。

「お待たせしました。ご主人様」
「ああ、いらつしやい」

動画はまたホテルの部屋に育代が入る所から始まった。
家を出た時の様子と変わらず、
育代はどこか後ろめたそうな表情をしている。

「脱ぎなさい」
「は」



「言い付けは守れたかな？」
「あの…… 家でもご主人様の事を考えるようにしています……
ですが、その…… 貞操帯を夫に見られてしまいました……」
「育代が見せたのか」
「違います！ 夫が無理矢理……
陰毛を剃った所を見たいと…… スカートをめくって……」




「君の夫が悪いと？」
「いえ…… 悪いのは私です」
「それは何故？」
「私はご主人様の所有物ですから……
ご主人様の所有物は私が守らないといけません」
「よろしい。良い回答だ。だがお仕置きをしなくてはいけないね」
「はい。申し訳ありません……」

悪いのは当然僕なのだが、ご主人様と奴隷の間では認識が違うらしい。
僕の所為で育代が謝らなくてはならない状況に改めて自分の行いを恥じた。







四つん這いにされた育代の傍らに
男がムチを持って立っている。
あれで打とうというのか。

「君は悪い事をした。 そうだね？」

「はい…… 私はご主人様に悪い事をしました」

「そうだ。 だからこれはお仕置きだ」

男がムチを振り下ろした瞬間、
パンと弾ける音が響いた。





「何を感じた？」


「い、痛いです」

「それだけか？」

「ご主人様に申し訳ないと思いましたが」

「肝心な気持ちさが抜けている」





「その痛みは私の怒りだ。
君が痛みを感じる分だけ
私の怒りは治まっていく」
「はい……」

「痛いのを誇っていいんだよ。
痛みの分だけ許されるといふ事だからね」
「痛みの分だけ……」
「そうだ」



「私の気持ちを考えてもらん。
考えながら痛みを受け止めなさい」
「はい……！」



「何を感じた？」

「う、嬉しいです……！」

「私が痛い思いをする分だけ」

「ご主人様は癒されるのですね……？」

「そうだ。それが奉仕の精神だ。」

「もうムチは嫌か？」

「嫌じゃないです！ もっと……」

「もっとおっつけてください！」


「よろしい」





「あっ！ あっ！ ご主人様あ……！」

何度となく育代は
けたたましい音と共に鞭で打たれた。
それだと言うのに育代は
恍惚の笑みを浮かべて歓喜の悲鳴を上げている。
演技とは思えない。
しかし、叩かれて喜ぶ妻の姿は
にわかには信じられなかった。



鞭打ちが終わると
育代は部屋に入った時の
後ろめたそうな表情から一変して
キラキラと輝いているように見えた。

「痛いかな？」

「痛いです。」

「だけどご主人様が私を

許して下さいったと思うと嬉しいです」

「ふふふ。君は本当に聡明な女性だな」

「ありがとうございます」

「おいで。可愛がってあげよう」

「はい」



「あっ……」

「これからも何かあったら正直に話しなさい。

その時はまたお仕置きして、全てを許してあげよう」

「ありがとうございます。ご主人様…… 私のご主人様……」

「はあん……!!」

「これから時間がある時は私の事を考えながら乳首を触ってオナニーしなさい」

「はい…… 貞操帯はどうしましょう?」


「乳首だけでオナニーするんだ。その内乳首だけでイけるようになる」

「はい……!! あっ……!!」


「育代ならすぐにイけるようになる」

「ああ……!! はい…… ご主人様あ……!!」





昨日はまだ演技をしているような不自然さがあったが
今日の育代はリラックスして自然にあえいでいるように見える。
お仕置きにより後ろめたさが払しょくされ
主人と奴隷の信頼関係が強まった結果なのだろうか。
ホテルから帰って来た育代の素っ気ない態度を思い出す。
どんだん育代の中であの男の存在が大きくなり、
対照的に僕の存在が小さくなっていてのではないかと不安になる。
不安になる一方で情欲が高まるのを感じた。

A manga-style illustration of a woman with large breasts and a man's hand on her chest. The woman has short red hair and is looking up with a slightly open mouth. The man's hand is resting on her right breast. The background is a soft, warm pinkish-red color.


「ご主人様…… 私もご主人様を気持ち良くしたいです」
「ふふっ、いいだろう。育代の好きなようにしてごらん」
「はい！」





「はぁ…… ご主人様の匂い……」

濡れた瞳で育代は男の陰茎に鼻を当てて匂いを嗅いでいる。
ハプニングバーで行きずりの男に
嫌々フェラチオしていた時とは明らかに様子が違う。
鼻をスンスン動かして頬を緩ませた表情は嬉しそうだった。
僕にする時だってこんな淫らな顔はしない。
いやらしく美しい笑顔は僕が求めていた理想の表情だった。



ピタリとピースがはまったような爽快感が頭によぎり、
下腹部が沸騰するように熱くなる。
同時に胸がえぐられるような思いをした。
言葉だけだと思っていたご主人様と奴隷という関係は
僕が思っているよりも深い絆で結ばれているのかもしれない。



とゅゅっ

れろれろ

「はむ……ん……へう……」

臭いを嗅いでいる時と同様に龟头も美味しそうに舐めた。時折上目遣いで男の顔色を窺っている。まるで褒めて欲しそうにしている犬だ。



「ふうん……！　じゅるっ！　じゅるるー！」

犬の様に育代はよだれを垂らしてペニスを舐め回す。
必死にペニスにむしゃぶり付く僕の妻を男は穏やかな目で見つめていた。

とゅば

はふ



「育代。口だけじゃなくて喉も使いなさい」
「はい。ご主人様」



育代は龟头を啜え込むと陰茎をゆっくり喉の奥まで飲み込もうとした。しかし、少し深く啜えただけで動きが止まってしまった。鼻息を荒くしてしばらく四苦八苦していたが遅々として飲み込めず、仕舞いには嗚咽と共にペニスを口から吐き出した。



「はー!! はー!! はー……!! 申し訳ありません……!!」
「喉を慣らせばおチンポの奥まで飲み込めるようになる。
ソーセイジでも使って慣らしておきなさい」
「はあ、はあ……!! はい、練習しておきます……!!」



喉の奥まで使つてするフェラチオ……
いわゆるイラマチオという奴だ。
あんなに苦しそうだったのに育代はめげずに
イラマチオの修得に燃えているみたいだった。
さっきの鞭といい、
この男のためなら痛みや苦しみも辛くはないとでも言いたげである。
だんだんと育代が僕の知らない女に変わりつつある気がした。



「はああ……!! あああ……!!」

育代が自ら腰を落として
男のペニスを膣に押し込めた。
震えたあえぎ声からは
セックスの快楽だけでなく、
この男とセックスする喜びを
感じていることが窺えた。
頬を火照らせ、甘えた声で育代が言う。

ああ……♡

ズ
グ
グ

「ご主人様のおチンポ気持ち良いですう……!!」

「ご主人様は私のおマンコで気持ち良くなってもらえますか……?」

「気持ち良いよ」

「嬉しい……!! 嬉しいですう……!! ご主人様あ……!!」



あっ♡

わん♡

パキッパキッ

愛想のない短い言葉でも満足したのか育代は男をより喜ばせるために腰を何度も振った。犬が飼い主にやるように育代は男の唇を、顔を、体を舐め回す。

これが見たかったのだ。セックスを喜ぶ淫乱な妻の姿に注視して、我慢汁で濡れているガチガチの陰茎を握る。ひと擦りすれば射精してしまいそうだ。



「ご主人様あ……！
すこい……！
気持ち、良い……！」

がむしゃらに振っていた腰の動きが緩やかになった。
慣れない腰振りに疲れたのか快楽に
耐えられなくなってきたのかは分からない。
それでも育代は懸命に腰を振り続けた。

パキヨン

パキヨン

はぁ♡
はぁ♡

「あああ……！ ご主人様ああ……！
イッちやう……！
イッちやいそうですう……！」
「私がイクまで我慢しなさい」
「はい……！ 私の中でイクんですね……？
はぁ、はぁ！」
「そうだ。
育代の子宮に私のザーメンを注いであげよう」
「はい……！ ご主人様のザーメン……！
私の中に……！」

中出しするというのに育代は何の抵抗もせず、
むしろ膣内で射精される事を喜んでいる様子だった。
僕の妻もこの男の子供を妊娠する事を望んでいるのかと思うと胸が迫る。

ハァキョム
ハァキョム

「ご主人様……！ ご主人様あ……！」

目をトロンとした夢心地の表情を浮かべて育代が身をくねらせる。
ビクビクと小刻みに震えており、腰を振るのも大変そうだった。





男が育代の膣内で射精した。
男の射精に育代は気が緩んだのか一際大きな声を上げて腰を震わせた。
腰を中心に全身が激しく痙攣している。
こんなにオーガズムを感じている妻を見るのは久しぶりだ。
僕も思わず射精してしまった。

あがが〜♡♡

ががが
ががが
ががが

びゅるっ
びゅるっ

ががが
ががが

「はー！ はー！ はー……
こんなに気持ち良いセックスは
初めてです……」
「ふふっ。
育代ならもつと気持ち良くなれるよ」
「はあ、はあ…… 嬉しいです……
ご主人様……」

はあ
はあ
はあ

動画はそこで終わっていた。

僕の誘いを断ってひとりできっさと寝た育代を思い出す。

ご主人様と敬う男と夫である僕に対する態度に明確な差を感じた。

僕が望んだ結果であり嬉しく思う反面、どこか寂しいと思った。

濡れたパンツを替えるために風呂へ行き、今日もまた自室で寝ることにした。

翌日は普通の生活を過ごした。
あの男と出会う前の穏やかな日常と何ら変わらない。

思えば育代が調教されたのは二日だけだ。

今度の調教日は前回から三日後、つまり明後日である。
たった二日で育代はあの男の奴隷となってしまうが
短い期間で築いた関係なんて会う機会を失えば
燃え上がった情熱もすぐに薄れていくのではないか。
心配と期待を抱いて一日を過ごした。



「博司さん、調教の間は別々で寝たいんですけど良いですか」

「……ああ、そうだね。その方が良いかな……」

「じゃあ僕は自分の部屋で寝るよ」

「すみません」

調教という言葉聞いて現実に引き戻される。
今日はその男と会わない日なのに妻は
あの男の奴隷として忠実なのだと思いと感慨深い。
胸にチクリと刺さる思いをしたが現在の僕らの関係を考えて納得する。



しばらくは自室で眠ることになるだろう。
みさとに起こされる心配もないので気楽だ。
最も、みさとが起きても面倒を見るのはいつも育代だったが。

その翌日も今までと変わらない日常を過ごした。
すっかり育代と触れ合う機会を失った事を除いて。

「お休みなさい」

「ああ、お休み」



今日もろくに育代と話せなかった。

手が届く距離には極力近付かず、


声を掛けても最低限の言葉しか発さない妻。

今の僕たちは夫婦と呼べないかもしれない。

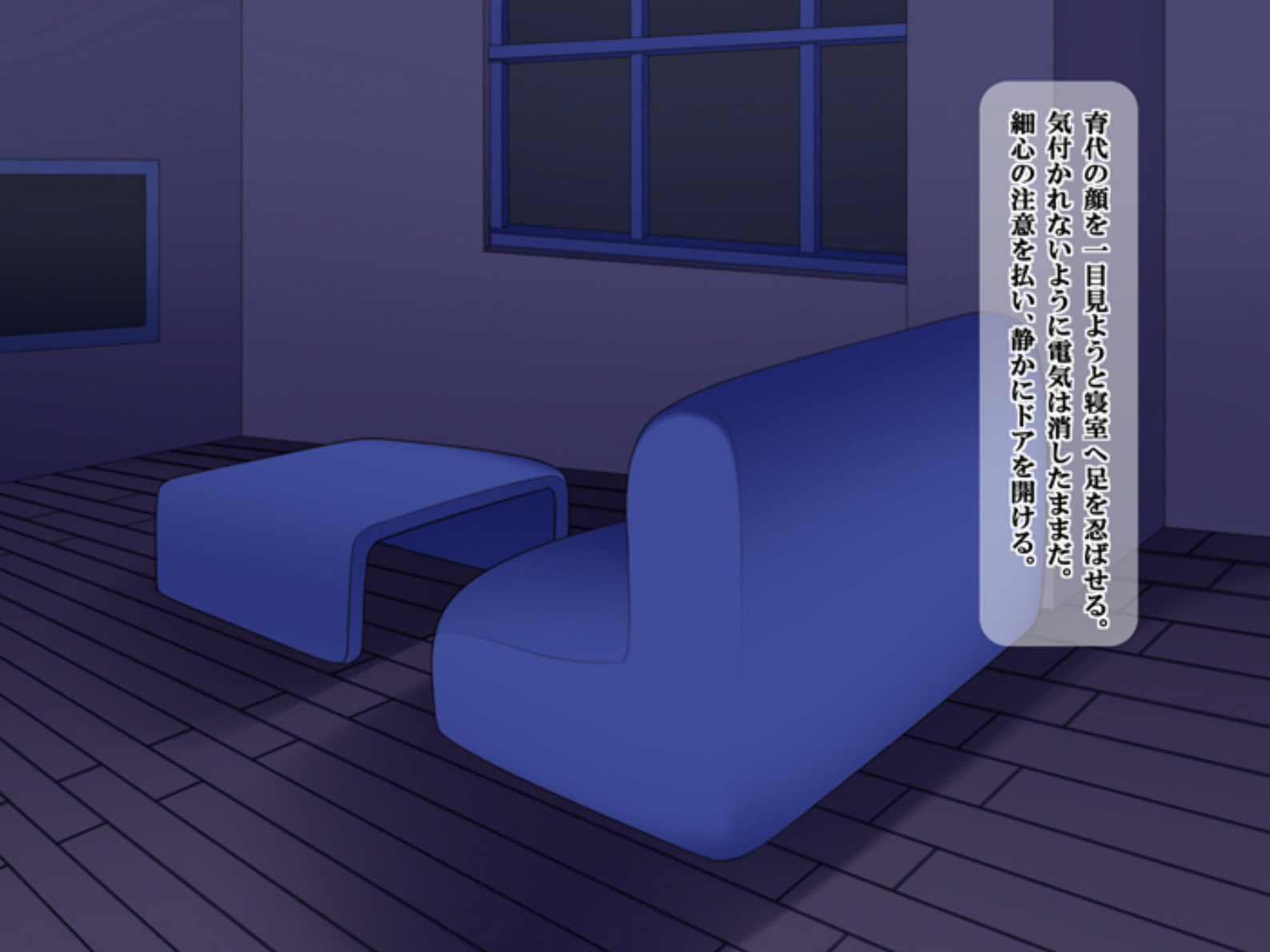
色んな男に妻を抱かせて何を今更と思うかもしれないが、

今までの行為は全て妻を愛しているからこそだった。

肌も触れず、言葉も交わさず、何も無いというのは酷く寂しい物だった。



動画を見直しても興奮はするものの虚しい気持ちで胸が締め付けられた。
育代が僕と触れ合わずに他の男とセックスするのは良い。
しかし他の男とセックスしていないにも関わらず
僕と距離を置かれるのは切なかつた。



育代の顔を一目見ようと寝室へ足を忍ばせる。
気付かれないように電気は消したままだ。
細心の注意を払い、静かにドアを開ける。





んっ、

んっ、

月明かりに照らされた妻は身悶えていた。
乳首を指でつまみ、
ビニール包装のままソーセージを
喉に押し込んでいた。
乳首でオナニー……
そしてイラマチオの練習……
あの男との約束に従っている
妻の姿がそこにあった。



ほろほろ

ふうっ！

合わない時間が出来れば
それだけ気持ちも冷めるのではないか
という心配は杞憂だった。
今も僕の妻は、あの男の忠実な奴隷だった。
きつと言われた通りに頭の中で
あの男を考えているのに違いない。
あの男に触られる感触、肌の匂いと体温、
そして膣の中で感じるペニスを
思い出してオナニーしているのだ。

会わなくても、触れなくても、
気持ちに通じている……
セックスに近いオナニーだった。



「んっ、ふ……」

注意深くしていなければ聞き取れないくらい小さくあえいでソーセージを飲み込む。あのソーセージには見覚えがある。二十センチくらいの大き目の魚肉ソーセージだ。あんな大きな物を喉に入れたら苦しいだろうに、乳首を擦るたびにピクピクと気持ち良さそうに身をよじっている。あの男を喜ばせるためなら苦しい思いも苦ではないと言いたげだ。



んぐんぐん...

部屋に押し入り、驚く育代からソーセージを取り上げ、ガチガチに勃起したペニスを喉の奥まで突き立てる。そんな風に出たらどれだけスツキリするだろう。貞操帯を無理矢理見た時の育代の悲痛な顔を思い出した。もう、あんな顔は見たくない。

開ける時以上に注意を払ってゆっくり扉を閉めた。

「お待ちせしました。 やっと呼んでくれましたね」
「すみません…… 急に……」
「いえ、ご主人様の命令ですから気にしないでください」
「……」



僕は寂しさを紛らわすために黄瀬さん呼び出した。
人肌が恋しくてたまらない。
誰でも良いから女を抱き締めたかった。

あの男と育代も使っているラブホテルで会うのはわざとではなかったが、
動画で見た部屋と同じ作りの部屋に足を踏み入れるのは不思議な感覚だった。
ここで育代の調教が行われたかもしれないからなおさらである。

「しないんですか？」

固まっている僕を黄瀬さんが促す。
僕とセックスする事に抵抗はないのだろう。
あの男の奴隷というだけあって堂々としている。



勢いで呼んでしまったが、
娘の友達の母親と肉体関係を持つのに若干の抵抗がある。
育代は僕の命令で他の男とセックスする事はあるが、
僕が育代以外の女性とセックスするのはただの浮気ではないか。
悩む僕の前で黄瀬さんは一枚ずつ衣服を脱ぎ落していった。

一糸纏わぬ姿になった黄瀬さんが僕の服も脱がそうとした。
香水の甘い匂いが鼻孔をくすぐった。
細い指が衣服越しに体に触れる。
柔らかなそうな肌を見ると思考が止まる。

丸裸にされて茫然と立つ僕に黄瀬さんが優しく微笑んだ。
「博司さんの好きにして良いんですよ」







「んっ……」

衝動的に黄瀬さんを
ベッドへ押し倒し、抱き締めた。
ペニスを刺激する女の良い匂い、
包み込まれるような柔らかい肌の感触。
頭が真っ白になって
黄瀬さんの甘い唇に貪り付いた。
黄瀬さんの唾液は育代とは違う味がした。

僕の舌が黄瀬さんの舌に触れると
同時に黄瀬さんも舌を突き出して
僕の舌に絡めてきた。
まるで亀頭を舐められているような
気持ち良さが舌を通して脳へと伝わる。
快楽に我れを忘れて
しばらく舌を絡め合った。





「ああん！」

黄瀬さん押し倒し、無我夢中で膣にペニスを挿入する。膣内はすでに濡れており、スムーズに奥まで入った。強い快感が龟头から背筋を通って全身に広がる。すぐにでも射精してしまいそうだ。

「ごめん、ゴムを……！」

ベッドに枕元に置かれているコンドームに手を伸ばすと黄瀬さんが止めた。

「ピル飲んでるから大丈夫。
博司さんのオチンポをそのまま感じさせて……」

久しぶりに受け入れてもらえた嬉しさと安堵から愛おしさが込み上げてきた。
陰茎の根元まで膣に押し込み、力いっぱい黄瀬さんを抱き締めた。

ポッポッポッ

あ……♡
あ……♡

「ああ！
気持ち良いわよ、博司さん……！
もっと抱き締めて……！」



「あっ！ はぁん……！ あん！」

黄瀬さんの言葉でタガが外れ、思わず激しく腰を振ってしまった。
もっと黄瀬さんの体を楽しみたかったのに
数回出し入れしただけで僕はあっけなく果てた。



「私の中に博司さんのザーメンがいっぱい……」

中出しセックスの気持ち良さと頭がポーンとしていて、射精した瞬間の事をよく覚えていない。早すぎる射精に男として恥ずかしくなった。



「しばらくこうしてて良い？」
「もちろん。私も博司さんに抱き締められるのすごく気持ち良い」
「僕も黄瀬さんを抱き締めると気持ち良い……落ち着く……」
「千春って呼んで……博司さん」
「ああ……千春……」



黄瀬さん……

いや、千春の柔らかい体を抱き締めると安堵感に包まれた。

こんなにリラックスしているのはいつ以来だろう。

千春の髪に顔を埋めると千春の匂いを強く感じる。

育代と違う匂いは新鮮で心地良い。

千春の膣内で萎えているペニスがムクリと反応を示す。

千春の体臭を嗅げば嗅ぐほどペニスは千春の中で大きくなっていった。



「ふふふっ。 博司さん若あい」

「千春ともっとセックスしたいから……」

「嬉しい…… これからもっとたくさんしましょう？ 明日も明後日も……」

「いいの？ 君のご主人様は？」

「育代さんに夢中だもの。 パーで博司さんたちと会ってから連絡なし。

今の私は博司さんだけの女」



あっ♡
ああ!!♡

ぱっぱっ

「千春……!!」
「なあに? 博司さん」
「愛してる……!!」
「ああ……!! 博司さん……!!」
博司さん……!!
もっと私を愛して……!!」
僕たちは獣のように
お互いの体を求め合った。

「博司さん、起きて。起きて」
「……」

育代以外の女に起こされて違和感を覚える。
何故黄瀬さんが、と寝ぼけ眼を擦る。
そうだ、昨夜僕と千春は男と女の関係になったんだ。



「私そろそろ帰らなくっちゃ。博司さんは大丈夫？」

「あー…… 僕も行くよ」

「それじゃ一緒に行きましょう」

時計の針は5時を指していた。
出勤する前に家へ帰る必要がある。

「千春も仕事があるんだよね」

「そう。その前にやよいに朝ごはん作らなくちゃ」

「お母さんだもん……」

「そうよ。やよいの母で、博司さんの女」

「……君のご主人様が僕と会うなど言ったら会ってくれなくなるんだろ？」

「それはないと思う。」

私はご主人様に飽きられちゃってるし、

ご主人様は博司さんの事を気に入ってるから」

「……育代を貸してるから？」

「さあ？ それはともかく！」

私が博司さんにもっと抱かれないって思っているのは本当ですよ」

「……ああ。僕も千春をもっと抱きたい」

「ふふっ。いつでも連絡してください。待ってますから」

「……うん」

ホテルを出るまでの間、僕たちは初々しい恋人のように手を繋いだ。



「あ……」

音を立てないよう玄関を上がった矢先に
起きたばかりであろう育代と顔を合わせた。
千春を抱いた罪悪感で腹の下がズシりと重くなる。



「黄瀬さんと会ってきたの？」

「あ…… うん……」

「そう…… ごめんなさい」

謝るのは僕の方だ。

しかし言葉が出ない。

浮気だ何だと責められるかもしれないと

危惧していただけに妻の淡泊な反応は拍子抜けさせた。

夜。
今日は育代の3日ぶりの調教日だ。
鼻歌混じりに育代は主人の元へ向かう準備をしている。
夫婦間の溝が深まり、
一層ふたりの関係が悪化したため育代の浮かれている様子が際立った。



「行ってきます」
「帰ってきたら起こしてくれ。みさとと一緒に寝室で寝てると思うから」
「わかりました」

育代は薄く笑うと踵をひるがえし、
彼女の主人が待つラブホテルへと向かった。

久しぶりにみさとの横で寝室の布団に潜る。

お前のママは今日はどうな事をされているんだろうなどと
心の中で呟き、目を閉じる。

千春の抱き心地を思い出すと胸がすく思いになり、
安らかに眠りに就くことが出来た。

「はい」

「ああ」

「お休みなさい」

「お休み」

育代に起こされてリビングへ行くと今日の分のDVDを受け取った。
何事もなかったように育代は寝室へと向かう。



千春を呼び出して外出する準備を整えた。

これが僕のやりたかった事なのだろうか。

しかし、もう引き返せない。

心の安息を求めて千春に会いに行く。



「お待たせ、博司さん」

「悪いね。遅い時間に」

「ううん。今日はもう会えないかと思っていただけから嬉しい」

急な呼び出しにも嫌な顔ひとつしない千春を愛おしく思った。



「千春……」

「博司さん……好き……」

名前を呼び合い、唇を重ねると
穏やかな気持ちになれた。

千春の体温を感じているだけで
気持ちが良い。

鬱屈した気分が晴れるまで
千春の肌とキスを楽しんだ。



「お願いがあるんだけどいいかな……？」
「なあに？」

「やよいのためにならない事以外だったら
何でも博司さんの言うことを聞くわよ」

「……そんな大げさな事じゃないよ。
今日貰った育代のDVDを
一緒に観たいだけだよ」

「ふふっ。」

「そんな事わざわざ私に
聞かなくていいのに。」

「改まって言うから」

「ピルなしで中出しさせてくれて
言うのかと思っちゃった」

「……僕の子を産んでくれて
言ったら産んでくれるの？」


「言ったでしょ？」

「博司さんが望むなら」

「何でも言うこと聞くて」

昨日初めてセックスした僕に
対する千春の信頼は
たかが知れている。
あの男の命令の偉大さを
改めて思い知った。
しかしそれでも僕の子を
産んでも良いとまで言ってくれた
千春を愛おしく思う。





備え付けのパソコンで今日貰ったDVDを再生させる。
さっきまでは妻が調教される動画を見て楽しむ夫という
恥ずべき変態性を千春に否定されないか心配していたが
僕はすっかり安心してた。
千春は僕の言うことを何でも聞いてくれる。
妊娠しろと言ったら僕の子供を産んでくれるくらい
僕を受け入れてくれてる。
千春に見せて恥ずかしい行為など何ひとつないように思えた。



DVDは例によって育代が部屋に入る場面から始まった。

『お待たせしました。ご主人様』

『やあ、育代。変わりないかい』

『はい！ 夫にも体を触れさせていませんし、

言い付け通りご主人様に会えない日も

ご主人様を思いながら乳首でオナニーしてました』

『ふふふ、良い子だ。どれ、確かめさせて貰おうか』

『はい』

育代が男の前で服を脱いでいく。
男が育代の貞操帯を外した時、陰部と貞操帯との間に糸が引かれていた。
この男と会えるのが嬉しくて股を濡らしていたのだ。
僕の妻はすっかり淫乱な女になった。
妻の性的高揚に呼応して僕のペニスも反り返っていった。





「うわっ！」

釣り餌に食い付く魚のように千春は勃起したペニスを口に含んだ。
突然の刺激に驚いて変な声を出してしまった。



「気持ち良くなりながら見た方が面白いと思っただけど嫌だった？」
「嫌じゃないよ。びっくりしただけ。……それじゃ、してもらおうかな」
「はい」



龟头が口内に包まれたと思ったら千春は次第に深く飲み込んでいった。龟头は喉の中で強く締め付けられ、陰茎には舌が這っている。陰茎の根本まで唇が当たっていた。口でもらっているとは思えない快感がペニスに走る。育代も練習していたイラマチオという奴だ。

ゲホッ
ゲホッ

喉の奥まで啜え込んだペニスを千春が吸う。セックスとは違う感触だがセックス並の快感に襲われる。こんな事を続けられていたらすぐに射精してしまいそうだ。

「千春……
すっごく気持ち良いんだけど気持ち良すぎてDVD見てらんないや……
出来るだけ軽めにしてくれない？」



「ふぁあぁい」

喉からペニスを引き抜き、龟头を口に含みながら千春が答える。
要望通り激しく吸ったりはせず、
口の中で龟头をゆっくり舐めているだけだ。
このぐらいの刺激ならDVDを楽しむのにちょうど良い。

れろ
れろ





『ふああ……！ ご主人様あ……！』

男が触れた途端に育代の乳首は勃起した。
コリコリと乳首を擦られ
育代は声を震わせてあえいだ。

『はあ……！ すこい……！』

『ジンジン痺れますう……！』

『ふふ。どんな事を考えてオナニーしていた？』

『ご主人様の事だけですう……！』

『おマンコに感じたご主人様のおチンポを思い出してオナニーしてました……！』

『他には？』

『ご主人様の匂いを思い出しながらお口でする練習をしました……！』

『太いソーセージを……！』

『喉に入れて……！』

『それでは後で練習の成果を見せて貰おう』

『はい！ 頑張ります……！』

『あつ！ や、やっぱり……！』

『本物のご主人様の指……！』

『すこく良い……！』

『おマンコがキュンキュンしますう……！』

れろれろ



妻があえぐ姿を見ながら千春にフェラチオされるのは格別だった。すぐに射精しないよう優しく舐めてくれているが、時折強く舌を擦り付け刺激にメリハリを付けてくれる心遣いが嬉しい。千春のサラサラな髪を撫でる。手のひらにふわりと感じる髪の毛の感触が心地良い。自分の部屋でひとり、妻の乱れた姿を見ていた時よりも充足感に満ちていた。



動画は育代が
イラマチオする場面へと変わった。
うっとりとした表情で
陰茎の匂いをしばらく嗅いだ後、
大きく口を開いて龟头から飲み込んだ。



『ふっ……ふっ……』

以前手こずっていた部分を
あっさり通り越して唇は
陰茎の根元まで到達した。
男のペニスが妻の喉を犯している。
妻の喉はどんな感じなのだろうか。
まだ僕も知らない妻の感触を想像する。

「千春……
これと同じのやっつけてなごう。」
「ふっ」



んんん

一度は断ったイラマチオを千春に頼む。
千春の口内にペニスが
飲み込まれていった。
龟头が喉に包まれるのを感じる。

「ジュルルル！ ジュルルル！」

卑猥な音を立てて千春が
ペニスを吸い込む。

ペニスを飲み込まれている状態から
さらに吸われ、舐められるとあっという間に
射精感が高まってきた。

画面に映し出されている育代は

喉元までペニスを啜える事が

出来るようになったものの、

それから先は上手く出来ないらしく

モゴモゴと口を動かしているだけだった。

それに比べて千春のテクニクは素晴らしい。

育代も千春みたいに上手くなるのだろうか。

ゲポ
ヌポ



「出るよ！ 千春！」

僕がそう言っていると千春は小さく頷いた。
どうやらこのまま射精して良いらしい。
苦しむ妻の顔をみながら思いつ切り射精した。





「ンク。ンク」

コクコクと千春は
僕の精液を飲んでくれた。
精液を飲み干した後も
ペニス全体を舐めまわして
綺麗にしてくれている。
感謝の意を込めて千春の頭を
何度も優しく撫でた。



『育代、もういいよ』

『はー！ はー！ はー！……』

申し訳ありません……

気持ち良くなかったですか……？』

『気持ち良かったよ。』

もっと練習すればもっと良くなる。

頑張ったご褒美をあげよう。

何が良い？』

『はい、ありがとうございます……！』

ご主人様のおチンポを

私のおマンコにください！』

『いいだろう。おいで』

『はい！』



ちゅぽ
ちゅぽ

『ご主人様のおチンポお……!!
おチンポ気持ち良い……!!』
男のペニスを喜んでセックスする
妻の姿はやはり煽情的だった。
千春の口内で弄ばれている
萎えたペニスが次第に
硬さを取り戻していく。



『これが欲しかったのお……!!
すこい、すこい……!!
すこい、すこい……!!』

会えなかった日も
待ち侘びていたであろう
この男とのセックスで妻は
淫らに乱れた。
夫には見せない知性の欠けた
淫猥な表情を見て、
僕のペニスは完全に復活していた。
ずっとペニスを舐め続けている
千春に声を掛ける。

「千春、こっちに来てくれ」
「はい」





「ああん！」

ズッポリと亀頭の前から
陰茎の根元までしっとり濡れている
千春の膣内に収まった。
千春の温もりを感じながら
乱れる妻を觀賞する。
射精したばかりなので
随分と余裕が感じられた。
動画の中であえぐ妻と
僕の上であえぐ千春を交互に見比べる。
妻が犯される快樂と
千春を犯す快樂がせめぎ合う。
贅沢なセックスだ。

『ご主人様あー！ イクッ！ イクッ！
イツちやいますう……!』
『私がイクまで我慢しなさい』
『は、はいッ……! あああ……!』
頭まっしろ……! ああ……!』
変になっちやうう……!』
ひうっ! あぐう……!』

前回よりも一層淫らに
嬌声を上げる妻は色っぽかった。
ペニスをキツく締め上げる
千春の膺と相まって
射精感が高まっていく。
イラマチオも気持ち良かったが
抱擁を伴うセックスは
体だけではなく心まで
気持ち良くさせてくれる。
このまま千春の中で射精しても
良かったがもう少し育代と
千春のセックスを楽しみたい。

「あう！」
上下する千春の尻を掴み、
僕の方へ引き寄せて押さえ付けた。
余裕から一転、
射精を引き延ばすことに決めた。

あうっ

「ああ……！ 良いッ！
博司さん……！
もっと抱き締めて……！」

密着した状態から千春が腰を振る。
陰茎の根元まで収まり、
ピッタリくっ付いているのに
千春の膣は
生き物のようなうねりを見せた。
ペニスから精液を
搾り取るうとしていた動きだ。
子宮が精子を吸い上げようと
しているみたいだった。

あっ♡



あ〜……!

ブルブル

ゴェルルル

『あ、あ、あ……!』
「ご主人、さま……!」
「博司さん! 博司さん……!」
ふたりの女の艶やかな声が頭を揺さ振る。
一瞬ふわりと思考が途切れたと思ったら
千春の中に射精していた。
ビクビクと陰茎が波打ち、
体内から外へと駆け抜ける
精液の感触が気持ち良い。

「はー…… はー……
ご主人様とのセックス……
最高です」

気が付けば育代の方の
セックスも終わっていた。
当然こちらと同様に
中出しセックスである。
育代も千春と同じく、
あの男にピルを
飲まされているのだろうか。

「育代もピルを飲んでると思う？」

「さあ？」

「でも育代さんはピル使ってないと思う」

「それは……」

「やっぱり育代を

妊娠させようとしてるから？」

「ふふっ。 だとしたら博司さんは嫌？」

「……いや、興奮する」

「あははは！

育代さんが妊娠したら

代わりに私が博司さんの

赤ちゃん産みますね」

今日も家には帰らず、
千春を抱いて眠りに就いた。

はあー……♡
はあー……♡



育代の調教が始まって3ヶ月が経過した。
調教は週に4日以上行われ、
僕の妻は順調に発情した牝犬のような女へと変貌を遂げていた。
それを確認するのはいつもDVDであり、
僕と育代との関わりは最早枯れたに等しい。
見た目には分からないが男と会うたびに
毎回避妊なしの中出しセックスをしていれば育代の妊娠は確実だろう。



「今日はアレがない日だね。僕は出掛けるから」
「いつてらっしゃい」

僕に対しては澄ました風を装っているが
彼女のご主人様に会えば涎を撒き散らして
チンポチンポと狂ったようにあえぐ淫乱である。
そんな妻と必要最低限の言葉を交わし、今日も僕は千春に会いに行く。





「あっ、あっ！ はあん！ あ、あ、あ……！」

千春の大きな尻をリズミカルに突く。
くびれた腰は両手で掴むと納まりが良く、
肉付きの良い尻は
僕の腹に当たると小気味良く揺れた。
僕の動きに合わせて
千春も組み伏された下で腰を振っている。
精液を搾り取ろうと愛液で濡れた膣肉が
ペニスを心地良くシゴく。



はっはっはっ♡
はっはっ♡

あれから毎日セックスしているだけあって、
すっかり僕たちの体は
お互いの体に順応していた。
どういう風にすれば相手が
喜ぶか分かるようになり
快楽の度合いが増した。
射精するまでの時間は
延びたが決して感度が落ちた訳ではなく、
より深く快感を
感じ取れるようになったと思う。
思えば僕と育代のセックスは
いつも僕からの一方通行で
ひとりよがりなセックスだった。



僕がどうすれば気持ち良くなるのか
考えてくれる千春とセックスしている内に
僕もどうすれば千春を喜ばせることが
出来るか考えるようになった。
お互いに求め合い、教え合い、
より密接なセックスになったと言える。
体と心が交わる本当のセックスだ。
今の僕にとって千春は
欠かせない存在になっていた。



「はあ、はあ！ イツちゃう……！！
イツちゃうよお、博司さん……！！」
「僕もイクよ！一緒にイこう！」
「うん！一緒にイこ……！！」
「一緒に……！！ ああ！一緒にい……！！」



「はああああ、あ、あ……!!」

千春の尻を突き上げて一番深い場所までペニスを挿入して射精する。

千春も尻を僕の方へとグイグイ押し付けて一滴も精液をこぼさない姿勢を取る。

僕の中から千春の中へ精子が送り出される。

陰茎が脈打つと同時に

千春は腰を大きく震わせ、

ペニスに絡み付く膣がうねりを見せた。



「はぁー!! はぁー!! はぁー!!」

精液を残さず千春の中に射精し終えた所で
千春はぐったりと力を抜いた。
毎度の事ながら千春とのセックスは
達成感と満足感を与えてくれる。
大人しくなった尻を
ひと撫でしてペニスを抜いた。



「ん……」

セックスした後の抱擁とキスは
定番となっていた。
こうしている時が
一番千春を愛おしいと
思うかもしれない。



初めて千春とセックスした時の
性欲にかまけた上辺だけの台詞ではない。
今の僕は本当に千春を愛していた。
千春が本当に僕の事を愛しているかは
気になるが……

「千春…… 愛してるよ」
「私も博司さんを愛してる……」



「……君のご主人様から連絡はないの？」

「全然。博司さんとしか会ってないし、

もちろん博司さんとしかセックスしてないよ」

「じゃあもうご主人様って言えないんじゃない？……う？」

「ふふっ。気になる？」

「育代さんの調教が終わる時に会おうと思う」

「……育代を貸してるから

千春を抱かせて貰えてるんだったな。

それじゃ育代の調教が終わったら……」



千春ともう会えなくなる。
そう言おうとしたら唇を塞がれた。



「大丈夫！」

「育代さんの調教が終わっても私は博司さんの物よ」

「君のご主人様が」

「帰って来いって言っても？」

「心配しないで。」

「それよりも育代さんが」

「博司さんの元へ帰った時に博司さんが」

「私をどうするのか心配だなあ」

「……心配しないでいいよ。」

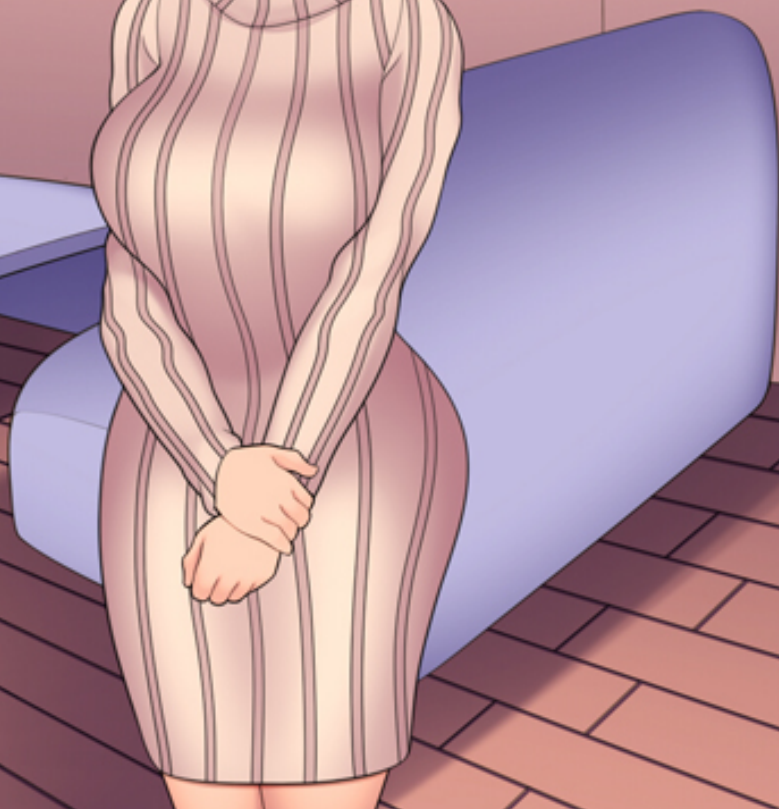
「愛してるよ、千春」

「愛してる。博司さん……」

あれだけあの男に耽溺^{たんだも}している育代が僕の元へ帰ってくるなど信じられない。育代を愛している気持ちはあるものの、心と体の距離が離れてしまった育代に対する思いは空虚なものだった。仮に帰ってきてきても育代はあの男の子供を妊娠しているに違いない。育代との子供が3人、やよいちゃんを入れて千春の子が2人と考えると金銭的に千春との間に子供を儲けるのは難しい。あれこれ考えると不安だが千春の匂いを嗅いでいると心が休まる。いつの間にか眠りに落ちていた。

「はい」
「ああ」

今日の分のDVDを買い、入れ替わりで外へ出る。
何も調教が終わった後の遅い時間にホテルで観る必要もないのだが、
しよっちゆう母にみさとの面倒を任せる訳にはいかないの
で調教日は育代が帰ってくるまで寝て待つことにしている。
千春に会いたかったので自然と変な生活リズムがついてしまっていた。





半日ぶりに会う千春の体を抱き締める。
柔らかさと温もりと匂い、全てが心地良い。

「いつも悪いね」
「ううん、全然。今日も博司さんと会えて嬉しい」

「新作買ったから一緒に観よう」
「はい」

レンタルした洋画DVDを観るような気楽さで
僕は千春に妻の痴態が収められたDVDを渡した。





DVDを再生させてソファに座ると
千春が優しくフェラチオしてくれた。
龟头を口に含む程度の軽いフェラチオだが
口内の温かさを感じるだけでも大分違う。
千春の頭を撫でてディスプレイを眺める。



はぁ♡

はぁ♡

「あ、あ、あ……ッ！
ご主人様のおチンポ……ッ！
アナル気持ち良い……ッ！」
今日もアナルセックスを行うようだ。
ここ所
アナルセックスする回数が多い。
よっぽど育代のアナルは
具合が良いらしい。

「はぁああああ……ッ！
おチンポお……ッ！
ご主人様のおチンポ最高う……ッ！」

妻が恍惚とした顔で涎を垂らす。
僕に見せる顔とは
百八十度異なる別人だ。
毎日ひとりでも
いじり続けているであろう乳首は
すっかり肥大化し、
全身性感帯となっている今は
乳首に直接刺激を与えなくとも
ぶつくと勃起する。
たぶたぶと豊満な乳房を揺らして
腰を振り、自分の肛門に
男のペニスを出し入れしている。

ズッ

ズッ

ああ！♡

ああ！

最近の調教記録DVDは
育代とあの男が
セックスするだけのAVと化している。
育代のアナル初体験は
2年前に終わっているし
特に感慨もない。
お尻は痛いと言うので
ハプニングバーでは使
用していなかったが
育代のご主人様のご指導ご鞭撻むちうちの結果、
今ではアナルセックスでも
オーガズムに達するようになった。

ご主人様のためにと日常生活でも
アナルプラグを挿入して
アナルを拡張する姿は
そそのる物があったが
アナルセックスそのものは
いまいちピンとこない。
育代にされる行為の中では
妊娠の可能性がある
中出しセックスが一番好きだ。





「そう言えば僕がアナルセックスした事はないな。」

「……あ、もちろん挿入する側の話ね」

「そうなの？　じゃ、私のお尻で試してみる？」

「それとも入れてあげようか」

「いやいや、入れるって……　何を？」

「んー？　指とか……」

「私がティルドを付けて後ろから博司さんをガンガン突いたり！

……とか」



「いや、そういう趣味はないな」

「男の人は前立線があるからお尻ですると気持ち良いらしいよ？」
してあげよっか？」

「いや、遠慮しとく……」

「博司さんは意外とノーマルだからな。」

したくなったら言ってね。

博司さんのアナルだったら舐めるのも平気だから」

「はは…… ありがとう」

千春は本当に僕の肛門を舐めたことがあるから説得力がある。

その時はフェラチオついでの不意打ちだったから

肛門辺りを舐められただけで済んだがそれだけでも異常に恥ずかしかった。

肛門に何かを挿入されるなんて考えただけでも恥ずかしくて死にそうだ。



「あっ、ほら二本挿しだよ」

千春の言葉でディスプレイに目をやる。



『はうらうら……ッ！
はあああ……ッ！』

肛門にペニスを挿入したまま
育代の膣に
バイブが挿入されていた。
ペニス並に太いバイブである。
調教が始まってからというもの、
育代が両方の穴を
同時に犯されるのは初めてだ。
膣と肛門にバイブとペニスを
同時に挿入されるのは
苦しいのではないだろうか。
僕の心配をよそに、
妻は快楽で顔を歪ませている。

ゴキッ
ゴキッ

『はうらうら……ッ！
はふうらうら……ッ！』
『ふふっ。
同時に犯されても
気持ち良いのかい？』
『はひい……ッ！
お、おマンコも、あ、アナルも……！
気持ち良いですうら……ッ！』
『苦しくはないかい？』
『お、お腹っ、パンパンで……ッ！
だけど……ッ！
気持ち良い……ッ！』
『よし、それじゃあ動いてこらん』
『はひい……！』



『んふうふうふうふう……ッ！
んふうふうふうふう……ッ！』

次第に荒くなる呼吸と裏腹に
腰の動きは少しずつ
緩慢になっていった。
腰はビクビク痙攣し、
膝はガクガクに震えている。

あ

あ

『んあっ！ んああ……！
あふうふう……ッ！
ん、んふうふう……ッ！』

育代が腰を上げると
膣からはパイプが、肛門からは
ペニスそれぞれ顔を出す。
腰を下ろすとパイプとペニスが
それぞれ育代の中へと
吸い込まれていく。
理性を失った獣のような顔と
息遣いで育代は一定のリズムで
腰を振り続けている。



『げ、限界、でしゅ……!!
ンクッ!!
イ、イッちやいましゅ……!!
ううッ!!』
『私ももう少しでイクよ。頑張れ』
『あいい……!! はあ、はあ!』
頑張り、ましゅッ!!
ご主人様あ……ッ!!
ご主人様ああ……ッ!!』



ラストスパートと言わんばかりに
育代は勢いよく腰を振った。
己を奮い立たせるためか
ご主人様と連呼し、
男の射精と同時に咆哮を上げた。



『んあああああああ……ツツ！』

育代の全身が激しく痙攣し、
盛大に潮を吹いた。
尻からは男の精液が溢れ出た。

あああああ〜♡




はぁ...♡

はぁ...♡
はぁ...♡

「ご主人様…… ご主人様あ……」
全身の力を使い果たした育代が
起きあがるまでしばしの時間を要した。

「今日のはまた一段とすこかったねえ」
千春は止めどなく溢れ出た我慢汁を綺麗に綺麗に舐め取ると顔を上げた。





「博司さんいっぱいカウパー出たもんね。
イツちやったのかと思っちゃった」

「そんなに出してないって」

「ふふっ。今日はお尻でしたいなあ。良い？」

「僕の尻は使わせないぞ」

「あはは！ 違うよ、私の。……博司さんのでも良いけど？」

「分かった！ 千春の尻でしょう」

「やたっ！ ちょっと準備に時間掛かるから寝ても良いよ」

アナル洗浄だろうか。

……調教記録DVDのおかげで知識だけ付いてしまった。
だったらまた今度にすればいいじゃないかとも思ったが
妙にハイテンションの千春を拒むのも悪い気がした。
ベッドで寝て待つことにする。

「博司さん…… 博司さん……」

千春の良い匂いがする。

このまま寝てしまいたかったが唇の感触で目を覚ました。



「今日はまだ寝る？」

優しい声色が耳に心地良い。

一瞬迷ったが

アナルセックスの用意が

整ったのなら乗り気な

千春のためにもやってみよう。

「用意は出来たの？」

「うん、シャワーで綺麗にしてきたよ。

こんなこともあるのかと

お尻を綺麗にするシャワーヘッド

持ってた良かった」

「こんなこともあるのかとって……」

「博司さんが喜ぶと思って」

「……そか、ありがと。じゃ、しようか」

「うん」



はぁ♡

はぁ♡

「はぁあ……！
博司さんのおチンポが
お尻に入ってるう……！」

しばらく使っていなかったであろう
千春の肛門にペニスを挿入するのは
難儀したが、ローションの助けを
借りてどうにか挿入できた。
千春の肛門は陰茎を
千切りそうなくらい
強く締め付けている。

ズプウ



「これ、キッツいねえ……」

「ふふふっ。」

「これがアナルセックスよ、博司さん」

「千春はお尻でするのが好きなの？」

「やたら楽しそうだけど」

「うーん、特別おマンコより

好きって訳ではないけど？」

「博司さんがアナル初めてって言うから

「博司さんの初めての女になりたかったの」

「ははは。 ああ、確かに初めてだ」

「ふふふ。 初めてのアナル、楽しんで」

「ああ。 楽しませてもらうよ」



ズボッ

お言葉に甘えて
腰を振ろうとペニスを引き抜く。
括約筋が強力に陰茎をシゴいた。
龟头部分まで引き抜こうとしたら
肛門から締め出されそうになったので
慌てて陰茎の根本まで腸内に押し込む。
すごい締め付けた。

ズボッ

「はああ！ はああ……！
良いわよ…… 博司さん……！」

あまり大きく腰を振ると

肛門から吐き出されて

しまいそうになるので

陰茎の根本付近を中心に擦り付ける。

すさまじく陰茎を圧迫する

強い刺激は早い内に

射精してしまう事を予感させた。

わざわざアナル洗浄までしてくれたのに

あっさり終わっては千春に申し訳ない。

射精を長引かせようと

一番奥まで挿入したまま腰を

グルグルこねくり回す。



あうっっっ♡

「あうっ！ ふうう……ッ！
そう、そう……！
私のお腹の中、博司さんのおチンポで掻き回してえ……！」

括約筋による強すぎる締め付けに比べて腸内の圧迫は緩やかだった。しかし陰茎の根本を締め付けられているので、龟头がパンパンに充血しており、膣に挿入する時よりも感覚が鋭くなっている。感度の高まった龟头にとっては、緩やかな腸内の感触も十分刺激的だ。

ゲキョ

ゲキョ



はぁ♡
はぁ♡

ぐわ
ぐわ

ぐわ
ぐわ

「これ、すぐイッちゃいそうだな……!」

「気持ち良いでしょ? 私のアナル」

「ああ、最高だよ……!」

「うふふっ。」

他に比べる人がいないからね」

「ははは。確かに」



ああ!
わん♡

「はあっ！ はあっ！ はあっ！」

千春の尻を数回突く。
強い快感によって
射精感が急激に高まった。
どうせ長くはもたないと思い、
思い切り突いてやった。

ズボッ
ズボッ



「博司さん、初体験の感想は？」

「気持ち良かったよ」

「それだけえ？」

「あー…… かなりキツかった」

「私もお尻でするの」

「久しぶりだったからね」

「拡張が足らなかったかも」

「ごめんね？」

「いや……」

「初めてお尻でするのが」

「千春で良かったよ」

「ふふ。」

「私も博司さんの初めての女になれて嬉しい……」

「千春の匂いと温もりに包まれて」

「リラックスした気持ちの中、」

「ゆっくりと意識が遠のいていった。」

はぁ
↓

はぁ
↓



育代があつた男に抱かれ、僕が千春を抱く。
そんな日常に何の疑問も抱かなくなったある日、あの男から連絡が来た。
『例のバーで会いましょう』と。



彼が僕と会う事は育代の調教を終えたという事であり、
同時に現在の日常を失う事を意味する。
育代がついに妊娠したのだろうか。
それは覚悟の上だから構わないが
千春と会えなくなる可能性を考えると怖かった。
最悪、千春も育代も失う事になる。

しかし問題を先延ばしにしても不安が大きくなるばかりなので、
いつでも会える旨を伝えた。

みゆきが寝た後、みさとを母に任せて僕たち夫婦が揃って出掛けた。
3ヶ月前と同じく、育代はコートにブーツという出で立ちだ。
コートの下が裸なのかは分からない。

妻がああ男の奴隷となった目から僕たち夫婦は夫婦であって夫婦でない、
赤の他人よりも壁がある存在同士となってしまうたので

気軽に話し掛ける事は出来なかった。

聞いても何も答えてくれないであるう妻の顔をそっと覗く。

穏やか妻の表情からは今日、

僕や彼との関係が大きく変わる事に対する不安など

微塵かじりも感じられなかった。

「ハッピーさんだ」
「お久しぶりです」

ハプニングバーに入ると顔馴染みの男たちが破顔して僕たちにまどわり付く。育代を抱きたくて仕方がないといった様子だ。
適当にはぐらかし、男たちをかき分けてカウンターの方へ向かう。



カウンターにはすでにあの男と千春がいた。
千春があつた男と肩を並べている姿は胸に刺さる。
僕と育代同様に千春とあの男の関係も
希薄になっているとは言えご主人様と奴隷という関係を解消していない以上、
彼女は僕よりも彼を選ぶのかもしれない。




「お久しぶりです。妻がお世話になってます」

世辞でも儀礼的でもなく、こんなに的を射てる挨拶はない。
DVDで見慣れている男の顔は柔和そうな笑みを浮かべた。

「お久しぶりです、ハッピーさん。DVDは気に入って頂けましたか？」
「はい。いつも楽しく観ています」
「それは良かった。今日は今までの成果をお見せしようと来て頂きました。
……育代」
「はい、ご主人様」




男の合図で育代は羽織っていたコートに手を掛けた。



育代から立ち上る色香は
周囲の男たちを魅了して
次々と勃起させていく。
僕も妻から漂うセックスを
予感させる性的な気配に
勃起させられてしまった。

育代の白い肌が露わになると
周囲の男たちは一斉に
好奇の視線を向けた。
以前ここに通っていた時の育代は
男たちの性的な視線から
逃れようと地面ばかり見ていたが、
今の育代は真正面から
いやらしい視線を満足そうに
浴びていた。



「ここにいる男たちを
満足させてきなさい」
「はい、ご主人様」

何のてらいもなく育代はそう言う
コートとブーツを店員に預けて、
男たちを手招きしながら
ベッドへと向かった。
ハーメルンの笛吹きのように
育代の背後にはわらわらと
男たちの行列が出来た。





「ああんッ！ うふふッ」

コンドームを付けていない
生のペニスを一気に啜え込むと
濡れていた膣から

愛液がほとぼしった。

僕でも彼女のご主人様でもない男の
ペニスを膣に挿入して
育代は淫らに微笑んだ。



「はあああ……!! ああん……ッ!
あんっ! あんっ!」

「おお……!! おお……!!
うおお……!!」

嬉しそうに育代が小刻みに、
そして大きく腰を振る。

下敷きになっている男は

育代のセックスに耐えられないのか
苦悶の表情を浮かべて

身をよじるばかりである。

周りの男たちは

育代の淫靡な姿で呆気に取られ、

息を飲み、亀頭を我慢汁で

濡らしながらも動けずじまつた。

ぱんっ♡♡

ぱんっ♡♡



「うふふ。ねえ？
私の恥ずかしい穴にも
おチンポちようだい？」

性交用に拡張された尻の穴で
男を誘う。
呼吸に合わせて肛門は
ヒクヒクと小さく開いたり
閉じたりしていた。
その小さな穴に
吸い込まれるように
ひとりの男がフラフラと
近付いて行った。



「ああああんッ！ 良いつ！
生おチンポすつこく良いい……ッ！」
育代は男ふたりに挟まれ、
膣と肛門を犯しているペニスに
歓喜の悲鳴を上げた。



「はぁ、はぁ！
本物のオチンポ最高う……ッ！
おまんこもアナルも幸せえ……ッ！」

トロンと表情を緩ませる育代だが
激しい腰の振りは健在だ。
肛門にペニスを挿入され、
膣にペニスを挿入し、
肛門からペニスを抜かれたら
膣のペニスを引き抜く。
アナルセックスする男の動きに
合わせると共に、
下にいる男のペニスも
しっかり捉えている。



「うう……！ 出るよ！
中に出して良いの……？」
「出してえ……！」
子宮の中にい……！
あなたのザーメン
ぶっかけてえ……ッ！」



「うっ！」
「あはっ！ 出てるっ！」
おチンポミルク
おマンコの中に出されてるう……！
あ、あ、あ、あ、あ……ッ！」

育代の腰がビクンと痙攣したかと思うと膝がガクガク震えだした。男の絶頂に呼応するかのよう。育代もオーガズムに達したようだ。



「あっ！ あっ！
あっ！ あっ！ あっ！」

育代の期待に応えるべく、
アナルセックスしている男は
激しく尻を突いた。
絶頂の余韻よゝんが残っている育代は
大人しく男のペニスを
肛門で受け止めている。
育代は男に求められる喜びを
味わうような、
どこか余裕を感じさせる
微笑みを浮かべていた。



「はうん！ んんっ……！
あうううう……！」

肛門の中にも射精されたようだ。
射精されるだけでも気持ち良いのか、
育代はオーガズムを感じて
腰を小刻みに震わせている。

おあがが♡♡

ピクピクも


ど
ズ
ン

ク
ッ
ッ

僕の妻は次々と
男たちの精を搾り取って行く。
目の前で繰り広げられる
妻の痴態に感動すら覚えた。
僕が望んでいた光景だ。

コポオ...

「はあ、はあ……!!
皆のザーメンを私の中に
注いでください」
妖艶な笑みだった。
鼻息を荒くした男たちが
我先にと育代を求めた。



「博司さん、育代さんのセックス見ながら
お口でももらいたくないんじゃないの？」
「いや、まあ、そりゃあ……」

育代と千春のご主人様に目を配る。
彼はにこやかにどうぞと手のひらを差し出して示した。

「それじゃ、頼む」
「はい」



千春は僕の勃起したペニスに口付けすると
DVDを見ている時と同じように龟头を口に含んで軽く舌を当てた。
口内の温かい感触が下半身に広がる。



「今回は試験のつもりでしたが育代のあの様子なら合格です。
他の男と交わる事に抵抗があるんじゃないかとも心配しましたが
いらぬ心配だったようですね」

妻のご主人様が満足気に言う。

「流石です……」

「としか言いようがありません。貴方に妻を任せて良かった」

「なあに、私はほんの少し快樂の喜びと気持ちの有り様を教えただけです」

「いえ、DVDでも最初の頃にすでに」

「妻は貴方の言い成りになっていましたし、」

「やはり貴方の手腕が素晴らしいかと」

「ふふふ。それは貴方の功績ですよ、ハッピーさん」

「僕の方？」

「ええ。貴方と育代は最初から主人と奴隷の関係を築けていました。貴方の命令があればこそ、育代は私の言い成りになったのです」

「しかし……」

「妻は僕の言う事を貴方ほど忠実に聞いていたとは思えませんが」

「それは命令の仕方に問題があったのです。」

「貴方は優しい性格のようだから」

「育代の意思を無視した命令を」

「無理矢理聞かせようとはしなかったのではないですか」

「はあ…… まあ、そうですね…… 家族ですし」

「そこですよ。」

「育代も家族や世間体という固定観念で」

「行動を抑制されていましたが、それを解きほいてやったのです。」

「あとはご覧の通りですよ」





育代がペニスを食べる姿を見て納得する。
今の妻は自由だ。

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡



「そんな育代にもたったひとつ縛られている物がある。それが彼女にとってのご主人様です。この3ヶ月、主人と奴隷の関係を頭に叩き込むためだけに費やしたと言ってもいい」


「つまり…… 貴方が妻のご主人様であると……」

「違います。彼女にとってのご主人様が誰かなのかは問題ではありません。ご主人様の命令に一切の反抗心を持たず忠実に従うという理念です」

はあ！
はあ！

あぁ！

あぁ！



そう言えば千春もそのような事を言っていた。
やよいちゃんに害がなければ何でも言う事を聞くと。
亀頭の先から溢れる我慢汁を
ペロペロ舐めている千春の頭をそっと撫でた。

「千春の事を大分可愛がって貰っているようで何よりです。
最初にお話した約束の事を覚えていますか？」

「あ、はい。 お願いがあるとか……」

育代の妊娠を告げるのだろうと身構えた。

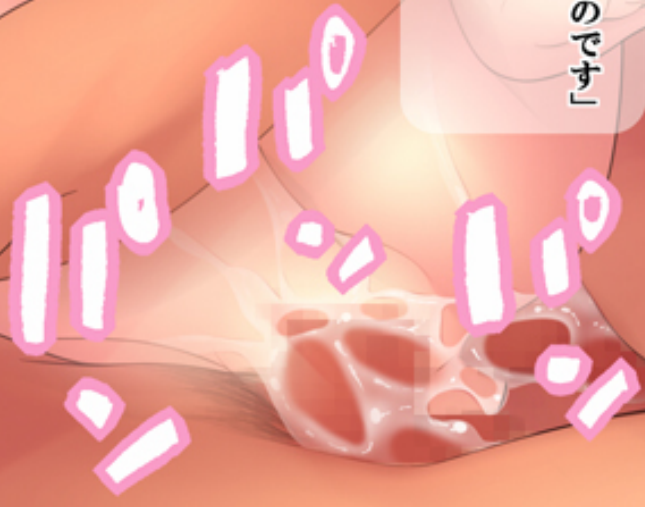


「貴方に千春のご主人様になって頂きたいのです」
「……は？」
予想外のお願いに思考が停滞する。

わん♡

わん♡

わん♡





「私は調教するのが好きであって、
調教の余地がない奴隷には関心がないのです。
ここに来たのも千春の新しい主人を探すためでした」
「……千春はそれで良いの？」

千春ちるに尋ねたつもりだったが答えたのは彼だった。



「奴隷は主人の決定に抗いませぬ。」

最も、貴方が千春の主人に相応しいか

試させて頂きましたが」

「ああ…… それで育代の代わりに抱けと」

「はい。 千春も貴方を気に入ったようですし

私も貴方に千春の主人になって頂きたいと思ひます」

優しく龟头を舐めていた千春がチュッと龟头を吸った。

はぁ♡


はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡



千春の顔を見ると千春はウィンクした。
「よろしく」と言っているようだった。



「……分かりました。千春の事は任せてください。
僕も千春との関係が終わるのは嫌でしたから……
「貴方にお返ししますよ。」
今日の試験が終わったら
貴方がご主人様になると育代には伝えてあります」
それで育代は？」



「それで育代は納得してるんですか？」
「もちろんです。そのための調教でしたから。
主人の命令は絶対です」

「そうですね……」

「てつきり貴方のお願いは育代を妊娠させることかと……」

「ピルも飲ませていないと聞いてましたので」

「ふふ、私は無精子症なんです。」

「今日のために調整してピルは飲ませましたからね」

「あ、ああ…… そうなんですか」



「ふふふっ、私にも妻がいるんですがね……
自分の血を引いた子が欲しくて
父に妻を抱かせた事もありました。それからですね。
私が女性を調教するようになったのは」
「は、はあ…… 奥さんを父親に……」
「ええ、だからハッピーさんにシンパシーを感じました。
育代から1年前の事を聞いて余計に。
私にも身に覚えがありますから」

あ~~~~~♡

あ~~~~~♡



「……育代は1年前の事、何て言っていました？」
「自分を責めていましたよ。」
「ハッピーさんに後ろめたい事があるなら
腹を割って話すのも良いでしょう。」
「今の貴方たちの関係は些細な事で崩れたりしませんよ」
「……はい」

も「育代さん……」
♡
♡
♡

淫乱で美しい妻の痴態を看まに僕は千春の口内で射精した。



彼の言う通り、僕と育代の関係は呆気ないくらい今まで通りに戻っていた。あまり表に出していなかったが、ここ数ヶ月の夫婦の不仲を心配していたみゆきと母も安心したようだ。最も、表向きの夫婦仲が元に戻っただけで内面はより異質な物へと変化している事にふたりは気付いていないだろうか。



「それではお義母さん、みさとをよろしくお願いします」

夜が更け、みさとにたっぷりミルクを飲ませた後、母にみさとを任せて夫婦で外へ出る。

我がままらしい我がままを母に言った事がないので快く引き受けて貰っているが実家に帰りたがっている母にいつまでも甘えてはられない。

もう少ししたらみゆきに面倒を見てもらうかと育代と相談しながら千春が待つホテルへと向かった。



「お待ちしておりました。ご主人様」
「今まで通り博司で良いよ」
「はい。博司さん」
「それじゃ、ふたりとも脱いで」


「はい」と声を揃えてふたりの女が服を脱いでいく。
ためらいは微塵もない。
ふたりとも僕の忠実な下僕となっていた。






妻と愛人……
いや、ふたりは僕の奴隷で、僕はふたりのご主人様なのだ。
これからは毅然とした態度でふたりに接しなければならぬ。
艶めかしいふたりの裸を見て不安を抱きつつも興奮した。





育代と千春が仲良く僕のペニスに奉仕する。
互いの舌を舐め合うように陰茎から龟头まで舌を這わせた。

今日は久しぶりに育代とセックスしようか。
それとも育代の目の前で千春とセックスしようか。
僕の足下にひれ伏してフェラチオする可愛い奴隷たちの頭を撫でる。



ふたりの女性に同時にフェラチオされるなんて初めてだ。
それぞれ違う動きをする舌に
ペニス全体を舐められるのは新鮮で面白かった。
これからは3人でプレイをする事になるのだから初めて尽くしだろう。
ふたりのご主人様としてしっかりリードしてやらなければならない。

他の男にふたりを抱かせるのもいい。
今の育代と千春なら
ハプニングバーなどではなくても他の男を誘い出す事が容易に違いない。
育代と千春が他の男に抱かれる姿を想像する。

.....どちらもそそる。
どちらもそそるがやはり
付き合いの長い育代の方がより興奮の度合いが大きい。



不意にある事を閃いた。

An anime-style illustration of two young women sitting in a hot spring. The woman on the left has short pink hair and is wearing a pink ribbon. The woman on the right has long brown hair. They are both looking at each other with expressions of surprise and pleasure. Steam is rising from the water between them. A large, muscular man's hands are visible at the top, resting on their heads. The background is a soft, warm glow.

育代の新しいご主人様を見つけてやろう——

もちろん誰でも良い訳ではない。
育代にとっても僕にとっても都合の良い相手でなければならぬ。
育代のご主人様となる男はじっくり吟味する必要がある。
その過程も僕の楽しみになるだろう。



龟头と陰茎をそれぞれむしゃぶり付く
ふたりの可愛い奴隷たちを撫でながら僕は微笑んだ。

END